

桂様切（梅尾類切）万葉集の最新事情

田中 大士

*キーワード

桂様切・梅尾類切・題詞・桂様切の底本

一 はじめに

数年前に、拙論著者は桂様切（梅尾類切）万葉集について論文を書いた（「桂様切（梅尾類切）万葉集の再検討」、『万葉集研究』第三八集 平成三〇年）。その結論は、従来の認識とはいささか異なるものであった。その認識とは、従来この断簡が、桂本万葉集と姿形が似ており（それゆえ、「桂様切」などの名称が付けられている）、平安朝の万葉集から切り出されたものではないにしても、相応に古い万葉集伝本を元に作られているであろうと言う認識であった。しかし、先掲拙論では、同断簡が、歌本文、訓とも仙覚校訂本を元にして出来ていることを明らかにした。つまり、同断簡は、平安朝風の古い万葉集断簡の形を取りながら、鎌倉時代以降に成立した仙覚校訂本を元にして作られた断簡であることが明らかになったわけである。それ以降、さらに一葉の断簡ならびに模写が発見

された。また、所在不明であった一葉が、国文学研究資料館の所有になった。先掲拙論発表当時は、まだ十分に検討が及ばなかった断簡もあり、また拙論以降出現した断簡から得られた情報も少なからず存する。さらに、新たに同断簡を入手した国文学研究資料館が、同断簡を対象とした研究プロジェクトを立ち上げ、成果を上げつつある。拙論は、先掲拙論以降に生じた同断簡についての様々な情報をまとめて、同断簡の最新事情を解説することを目的とする。

二 桂様切一覧

まずは、最近までの桂様切の伝存状況を一覧しておこう。なお、それぞれの断簡の「輯影」とあるものは、『校本万葉集』諸本輯影の画像番号（注1）、「図版」とあるものは、『古筆学大成』巻十二（平成二年）の図版番号である。歌番号は、旧国歌大観番号による。

巻七

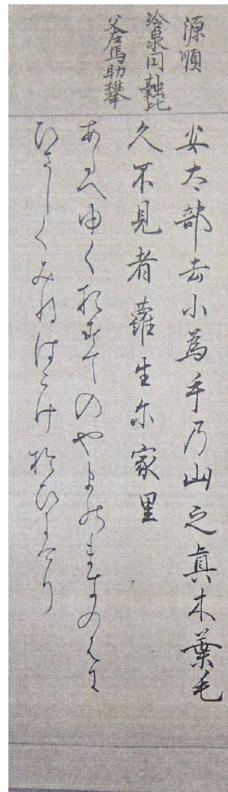
- ① 一一一四～一一一五 子爵税所家及某家御所藏品目録（注2）
- ② 一一二六本文一部～一一二七 輯影49・図版40
- ③ 一一二一～一一二二 石川武美記念図書館蔵 新增補輯影24・図版41
- ④ 一一二四 林原美術館蔵『古筆臨模聚成』模写
- ⑤ 一一二五～一一二六 国文学研究資料館現蔵 追補輯影7
- ⑥ 一一二七～一一二八 東山御文庫蔵御物手鑑 図版42
- 巻八
- ⑦ 一一四二四訓～一一四二六本文 京都国立博物館蔵『藻塩草』 図版43
- ⑧ 一一四二六訓～一一四二八本文一部 東京某家蔵手鑑『藻塩草』 新增補輯影25・図版44
- ⑨ 一一四三一訓～一一四三三本文一部 徳植俊之氏蔵
- ⑩ 一一四三六訓～一一四三八本文 吉田氏外某旧家所蔵品目録
- ⑪ 一一四四六本文一部～一一四四七訓 高岡市万葉歴史館蔵
- ⑫ 一一四六二～一一四六三 仙台伊達家旧蔵古筆手鑑『旧錦囊』 図版45
- ⑬ 一一五三六訓～一一五三八本文 古典籍展観大入札会目録（東京古典会）（令和三年十一月）

なお、一般に画像が閲覧できない①と⑩については、『古筆学大成』作成時の画像資料（センチューリミュージウム旧蔵）を所蔵する慶應義塾大学斯道文庫のご厚意で閲覧した。

桂様切は、巻七、八の二巻にわたり、模写も含め、一三葉の断簡が確

認されている。巻七が六葉、巻八が七葉である。その多くは、『校本万葉集』（増補・新增補・追補を含む）と『古筆学大成』巻十二（平成二年）に、図版が紹介され、また内容が校合されている。ここでは、両書で紹介されていない断簡について簡単に触れておく。

④は、林原美術館蔵池田家旧蔵の池田光政筆『古筆臨模聚成』に所収された模写切である。③と⑤の間の一一一三から一一一四の歌本文、訓八行分のうちの四行分が模写されている。池田光政（一六〇九～一六八九）による模写であるため、桂様切が、光政の没年以前には存在していたことが確認される。



⑤は、『校本万葉集』『古筆学大成』両書で紹介されているが、従来所在不明であった。が、近年国文学研究資料館の所蔵になり、詳細な調査が可能になった。本論文も、同館のプロジェクトの成果の一端である。

⑨は、徳植俊之氏（大東文化大学）蔵の断簡である。氏の論文「『母尾類切』考」（汲古第七二号平成二九年十二月）で紹介されている。この断簡には、他の断簡には見られない歌より高い題詞が認められる（後述）。

⑪は、高岡市万葉歴史館蔵の断簡である。同館の『常設展示と館蔵主要古典籍』（平成一五年）などに紹介されている。

⑬は、令和三年一月の東京古典会に出品されたものである。この断簡の出現によって、桂様切の出典がより明らかになっている（後述）。

三 題詞の高い断簡

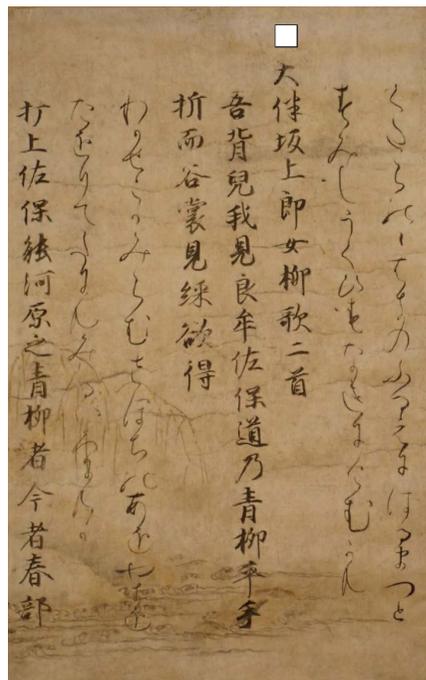
先述のように、桂様切は、桂本万葉集をまね、仙覚校訂本系統の伝本を元に作り上げられた断簡である。平仮名別提調、料紙の鳥、植物の装飾などからそれがうかがえる。しかし、桂様切は、桂本が持つ大きな特徴を持ち合わせていない。それは、題詞が歌より高いという特徴である。

桂本は、題詞を歌より高く書いているが、桂様切は、題詞は歌より低い。これは大きな違いといえよう。ところが、先掲徳植俊之「梅尾類切」考¹は、著者自身所蔵の桂様切を紹介しているが、その断簡は、題詞が歌より高く書かれている。第三行の「大伴坂上郎女柳歌二首」の部分である（□）。つぎの「吾背兒我：」よりも高くなっている。

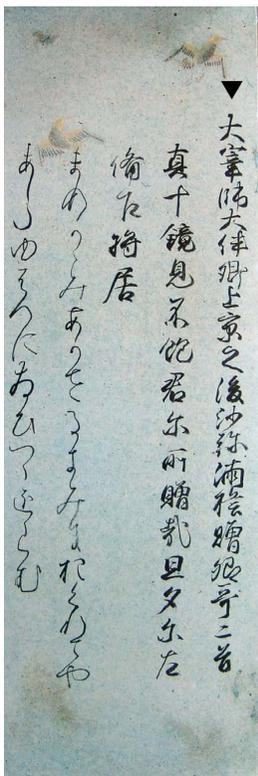
この点については、先掲拙論でも言及しているが、それがどのような意味を持っているのかについては不明のままであった。今回、先述の国文学研究資料館での研究会でその事情が明らかになった。

その事情を明らかにする前に、万葉集の題詞の高さについてかいつまんで説明しておきたい。題詞の高低の件は、万葉集の研究者以外には、なかなか理解しにくい面があるからである。万葉集の伝本は、平安時代

桂様切巻八、一四三二〜一四三三（徳植氏蔵）



桂本巻四、五七二（宮内庁蔵）



書写の本も少なからず存するが、その多くは題詞は歌より低く書かれている。これは、後世の和歌集の詞書きが歌より低く書かれるのと軌を一にしている。ところが、万葉集の現存最古の伝本桂本は、題詞が歌より高く書かれている（右図版の▼）。この形は、同じ平安期書写の金砂子

として、同館所蔵の桂様切と徳植氏所蔵の桂様切を対象とした観察が行われた。桂様切は、少ないながらも全部で一三葉現存が知られ、全国に散在している。これらの断簡の実際の判面を熟視する機会は少ない。まして、実物を前に、古筆学の研究者が意見を交わす今回の手法は有効で、大きな収穫をもたらした。まず、当面の二葉は、国文学研究資料館現蔵が巻七、徳植氏蔵切が巻八と異なった巻次ながら、あきらかに筆跡が一致していることが確認された。その折、参加者からの発言で、桂様切といわれる断簡はすべてツレと考えて大丈夫かという疑問があがったが、この会の後、拙論筆者が改めて、寸法（わかるものだけであるが）、判面などを確認したが、ツレとして矛盾するものは見いだせなかった。

しかし、当日の最大の成果は、徳植氏蔵切の題詞についての発見であろう。当該断簡は、先述のように、一つだけ題詞が歌より高くなっている。桂様切現存一三葉のうち、題詞が存在するのは六カ所。他の五カ所は題詞が歌より低い。桂様切は、題詞の高い桂本をまねて作られているわけであるから、題詞が歌より高くなってもおかしくはないが、一箇所だけ他の断簡と題詞の高さが異なっていることには大きな問題が残る。他の五カ所のあり方からすれば、桂様切は、本来題詞を歌よりも低く書いていたように考えられる。しかるに、徳植氏蔵切一四三二の題詞は歌より高くなっている。

念のため言うっておけば、桂様切巻八は、徳植氏蔵切の前には⑧の切があり、⑧から徳植氏蔵切までが一六行、二葉分と想定できる。また、徳植氏蔵切のあとは、⑩の切があり、その間は、やはり一六行、二葉分と

想定でき、徳植氏蔵切の位置に他の切との矛盾はない。筆跡も、先述のように問題はない。桂様切のツレと言ってよいであろう。

当日、この徳植氏蔵切の矛盾点を、書誌的な観点から解決しようと執念を燃やしていたのが舟見一哉氏（実践女子大学）であった。一通り、皆の熟覧が終わってからも一人徳植氏蔵切の観察を繰り返し、とうとう、当該の題詞が、一度切られて、貼り直されていたことを見出したのである。発見までの詳細な経緯とデジタル顕微鏡による切り貼りの証拠写真は、別途の報告（本『調査研究報告』掲載の舟見一哉他「国文学研究資料館及び橘樹文庫蔵榊尾類切（桂様切）『万葉集』の高精細マイクロスコープによる紙面観察」）をご覧ください。当該切の題詞が高い例は、本来歌よりも低く書かれていた題詞を歌より高くするように細工した結果であることをまずは報告しておく。一般に断簡に切り貼りの細工が施された場合、実物を一見すればその細工が看取されることが多い。しかし、当該断簡の場合、きわめて精緻に細工が施され、熟覧当初の時点では、それを疑う者はいなかった。しかし、徳植氏蔵切の題詞も、実は歌よりも低く書かれていたことが判明し、桂様切は、本来題詞が歌より低く書かれていたであろうことが判明した。やはり、当初の推定通り、桂本の題詞を歌より高く書く形態は、むしろ不自然として、桂様切の制作者はその形態を忌避したと考えられる。一方、徳植氏蔵切に細工を施した人物は、桂本によく似た断簡であるからには、桂本同様題詞が歌より高くあるべきであると考えたに違いない。

五 仙覚校訂本諸本か版本か

先掲拙論では、桂様切が仙覚校訂本を元にしたことは明らかにしたが、仙覚校訂本にもいくつかのバリエーションが存する。そのどれに属するものが元になっているのかについては明らかに出来なかつた。ちなみに、仙覚校訂本のバリエーションは次のようなものである。

- 寛元本 神宮文庫本・細井本（除巻四〜六）
- 文永三年本 西本願寺本（除巻十二）
- 文永十年本（頼直本系統） 温故堂本・陽明本
- 文永十年本（寂印・成俊本系統） 大矢本・近衛本・京大本
- 活字無訓本（古活字本）
- 活字付訓本（古活字本）
- 寛永版本（製版本）

寛元本は、第一次校訂本、文永本はそれ以降の校訂である。文永十年本は、頼直本系統と寂印・成俊本系統の二系統に分かれている。この中のどれを元にしていたかで、桂様切の出自も成立事情もより明確に出来ると思われる。先掲拙論で明らかに出来たのは、巻八、一四二四〜一四二六の歌順で⑦、これらが、寛元本・文永三年本・版本類と一致し、文永十年本とは一致しないこと、巻八、一四二七の第三句⑧で、

寛元本・文永十年本の一部（大矢本）・版本類と一致することなどであった。この二カ所だけから一致するのは、版本類の活字付訓本と寛永版本ということになるが、いかんせん、あまりに材料が乏しく、最終的な判断を見送った。

先掲拙論が発表されたあとに唯一公表された桂様切は、東京古典会に出品されたものである⑬。この断簡からは、わずかではあるが、保留していた問題についての情報が存している。その翻刻を示せば、次の通りである。画像については、東京古典会の『古典籍展観大入札会目録』（令和三年一月）の目録を参照願いたい。

よひにあひてあさかほはつるかくれの、
はきはちりにきもみちはやつけ

山上臣憶良詠秋野花二首

秋野尔咲有花乎指折可伎数者七種

花其一

あきの、にさきたるはなをておりてか

すかさふれはな、くさのはな

芽之花乎花葛花瞿麦之花姫部志又

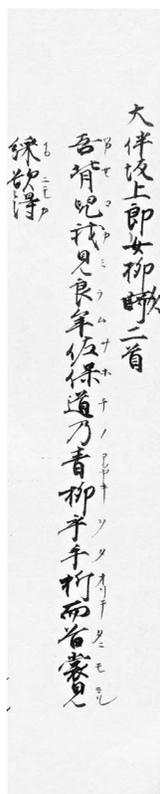
巻八の一五三六の訓から一五三八の本文の途中までの部分である。この中で、まず、第三行の題詞「秋野花二首」の部分は、大矢本・京大本という文永十年本（寂印・成俊本系統）の二本が「秋野花哥二首」となっ

ており、桂様切が文永十年本（寂印・成俊本系統）とは一線を画していることが知られる。また、一五三七の第三句は、桂様切は「ておりて」と字足らずに読んでいる。ところが、版本類である活字付訓本、寛永版本も同じ字足らずの訓である。この部分、「テヲオリテ」などと読む他の仙覚校訂本系統と異なる。当該の断簡から得られる証拠も十分とはいえない分量ではあるが、先掲拙論で見出した証拠から得られた結果と一致し、いずれも活字付訓本、寛永版本と合致していた。つまり、仙覚校訂本の系統の中でも、版本類により近いという事になろう。おそらく、桂様切の作成者は、仙覚校訂本の中でも、版本類を使用していたと考えられる。

桂様切が、仙覚校訂本を元にしていて、仙覚文永本諸本ではなく、版本類を元にしていかになる意味があるか。まずは、活字付訓本、寛永版本出版時よりあとに桂様切が作られたと考えられることである。ただ、活字付訓本は、『校本万葉集』（首巻）などで指摘されているように、刊記等がなく、刊行時期はわからない。古活字版本全般としては、元和・慶長頃（一五九六〜一六三三）の刊行と考えられている。一方、寛永版本は、寛永二十年（一六四三）の刊記が備わっている。最低限、桂様切は、江戸初期以降に作られた可能性があると言いうことになる。もう一つ、これら版本類を元にしているとすれば、題詞の高さについては述べておく必要がある。先述のように、仙覚は、第二次校訂本の文永本で、題詞を歌より高く仕立てる形に変更している。したがって、文永本諸本（文永三年本も文永十年本も）は基本的に題詞が高い。とこ

ろが、活字付訓本、寛永版本などの版本類は、前身の活字無訓本（題詞の低い寛永本を元本にしている）の影響ゆえか、題詞が歌より低くなっている（注4）。

西本願寺本（石川武美記念図書館蔵） 文永三年本



寛永版本（日本女子大学蔵）



桂様切を作る際、作成者が見ていた仙覚校訂本は、題詞が歌より低い版本類であったと考えられる。このことは、桂様切を題詞の低い形につくりあげることの影響があったかも知れない。

これまでの叙述で、桂様切の制作者が、仙覚校訂本の中でも「版本類」によっていたと再三述べてきた。このような持って回った言い方には理由がある。『校本万葉集』（首巻）以来、活字付訓本と寛永版本は、古活字本、製版本の違いはあれ、ほぼ同じ内容であると認識されてきた。また、活字付訓本は、あまり世間に流布しない本であると考えられてきた。

したがって、この両者に近い本文・訓がある場合、まずは広く流布していた寛永版本によっていたと考えるのが一般的な判断であった。しかし、近年、江戸期に調度品として複数作られていた万葉集の平仮名傍訓本は、伝本によって、活字付訓本による本、寛永版本による本両様があることが明らかになってきた（田中大士「新たな万葉集伝本群の発見―万葉集平仮名傍訓本―」万葉古代学研究年報第一七号 平成三二年三月）。ほとんど流布していないとされてきた活字付訓本の享受の実際の事例が見出されたのである。ならば、桂様切の場合も、どちらによっているかを明らかにしなければならない。ただし、活字付訓本と寛永版本との本文・訓の差異は微少である。桂様切の現存する範囲内での両者の異同は、次の二カ所に過ぎない（いずれも①の断簡所収部分）。

一四四六第一句「はるの、に」 附「ハルノ、ニ」 寛「ハルノニ」
一四四七第四句「こゑなつかしき」附「コエナツカシキ」寛「コエナツカシキ」

前者は、あきらかに活字付訓本と一致しているが、わずか一字であるし、後者は、仮名違いの例である。もう少し明確な事例が出現してから判断を下すべきといえよう。しかし、仮に桂様切の本文・訓が右の調査結果の通り、活字付訓本に近いことが明確になって行けば、活字付訓本の享受という点で、さらに展望が開けて行くように思われる。

以上、桂様切が依拠した仙覚校訂本の系統についてはまだ不明な点が

多いが、少なくとも、寛元本・文永本諸本ではなく、版本類によっていた可能性がより高くなったことは確認できる。

〈注〉

1 『校本万葉集』（諸本輯影）は、正編・増補が昭和七年、新増補が昭和四四年、新増補・追補が平成六年。

2 名称は、『校本万葉集』新増補の諸本解説による。『古筆学大成』によれば、昭和十年五月六日、東京美術倶楽部における「野崎・木村両家品入れ」に出品（出品番号612）とある。

3 仙覚文永三年本の奥書該当部分は次の通り。

次に歌詞高下の不同とは、光明峰寺入道前撰政家の御本、鎌倉右大臣家の本、忠兼の本のごときは、歌高く詞下る。先度の愚本はこれに移し畢んぬ。法性寺殿御自筆の御本、またこれに同じきなり。然りといへども、古本並びに然るべき本々、多く以て、端作の詞は指し挙げてこれを書き、歌は引き下げてこれを書く。いはゆる松殿の御本、二条院の御本の流、並びに忠定卿の本、尚書禪門の本、左京兆の本皆同じ。道風行成等の手跡の本、同じく以て詞挙がり歌下る。よりて去今両年二箇度書写の本はこれに移し畢んぬ。

「先度の愚本」は、寛元期の第一次校訂本、いわゆる寛元本のこと。「去今両年二箇度書写の本」は、文永二、三年の本を指す。ちなみに、文永二年の本は、中務卿親王（宗尊親王）に献上されたとするが、

現在この系統の伝本は残っていない。

4 活字付訓本の前身である活字無訓本は、寛元本系統（巻四から巻六までが冷泉本系統である細井本と同系統）の林羅山本をもとに作られているが、活字付訓本は、それに文永十年本（寂印・成俊本系統）の大矢本系統の伝本の内容を取り込みながら作られている（『校本万葉集』首巻）。活字付訓本の巻七の一一九四から一一二二までが、他本と異なり、大矢本系統とだけ歌順が一致することはよく知られている。

〈付記〉

論文執筆に当たり、桂様切④については林原美術館に、⑨については徳植俊之氏に、画像掲載の許可をいただいた。また、桂本万葉集の画像については宮内庁に、西本願寺本の画像については石川武美記念図書館に、寛永版本の画像については日本女子大学日本文学科に掲載許可をいただいた。記して感謝申し上げる。また、本稿は、日本学術振興会JSPSの科学研究補助金の助成（基盤研究（B）「万葉集仙覚校訂本の総合的研究」課題番号18H00646代表研究者田中大士）、国文学研究資料館古典籍データ駆動研究センターによる「データ駆動による課題解決型人文学の創成」準備研究、実践女子大学私立大学ブランディング事業「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」に基づく成果である。記して感謝申し上げる。

